基調講演

世界観の発見
―文化財の魅力を引き出す展示デザイン―

木下史青
東京国立博物館 学芸企画部企画課デザイン室長

講師紹介

木下史青　KINOSHITA Shisei

1965 年東京生まれ。東京芸術大学大学院美術研究科修士課程環境造形デザイン専攻修了。東京芸術大学美術学部デザイン科助手、（株）ライティング プランナーズ アソシエーツ、東京国立博物館学芸企画課展示調整室研究員を経て、現在、独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館学芸企画部企画課デザイン室長。日本の博物館・美術館で初の展示デザイン専任スタッフとして活躍する。

2008 年春の薬師寺展で奔走するさまは、ＭＢＳ『情熱大陸』でも取り上げられた。愛知県立芸術大学デザイン科、女子美術大学芸術学科などで非常勤講師も務める。著作に、『博物館へ行こう』（岩波ジュニア新書）、『昭和初期の博物館建築』（共著、博物館建築研究会編）など。

展示デザイナーとして、東京国立博物館に採用されて8年目、[デザイン室]が設置されて3年目になる。独立行政法人化という歴史的な改革をきっかけに、博物館をとりなく社会的な状況は大きく変わった。この「博物館を開いていく」といえるサービス向上への大きな流れの中で、博物館における[展示デザイン]とは何か、その存在意義を自問しつつ、この博物館の照明環境を進化させてきた。

博物館は、文化財としてのモノの[収集][研究]、そして[保存]と[展示]という、重要だが矛盾する機能を担っている。博物館における展示デザイナーは、文化財であるモノをどのように安全に配置し、照度制限などの展示条件を満たしながら、より正しく・より美しく見せることを考えることが仕事である。私は、この[展示]の決め手となるのが[照明デザイン]と位置づけている。

モノを美しく展示し、正しく光をあてることによって、モノは自らその価値と魅力を語り出す。そんな展示を通して、博物館を、保存を主な機能とした[収蔵庫]から[充実感の得られる場所]として、市民が集い、学び、憩い、そして新しい価値観・世界観を創造する場にしてみたい。

（中略）

展示デザインの評価は、「作品そのもの」よりも「展示会場」が強い印象として記憶されるようでは成功とはいえない。

「よくわからないけれど、作品がよくみえた」「なぜだか雰囲気がよく、落ち着いて鑑賞することができた」…こういう感想が聞かれることがまずはありがたい。この「よくわからないけれど」とか「なぜだか雰囲気がよい」ことの決め手は、空間の光イメージづくりと、それを実現させる照明の詳細設計にかかっている。さらに「あの展示風景を見に、もう一度行ってみたい」というのは最大の賛辞と受け止めている。

（中略）

展示・照明デザインをする上で、私を悩ませ、かつ最大限の関心事は、「展示物がもともとあった本来の場所の光」と「博物館・美術館において展示物を見せる光」をどのように折り合わせるべきか、ということだ。これはモノそのものの機能・意味・価値を問う行為であり、博物館・美術館の存在意義を問うことにもつながる問題なのである。

「ミュージアム・ライティングの世界」
照明学会誌 Vol.90, No.10, p.739-743 (2006)より引用